

山と博物館

第46巻 第12号 2001年12月25日

市立大町山岳博物館

カモシカの赤ちゃん「五十鈴」

大町山岳博物館

この春に大町山岳博物館の付属園で生まれたニホンカモシカの赤ちゃん（メス）の名前が、公募によって「五十鈴（いすず）」に決まりました。

このカモシカの赤ちゃんは、今年五月十四日に付属園内のカモシカ園で生まれました。

お父さんは「クロ」十九歳、お母さんは「ミネコ」十二歳。二頭の間に生まれた五十鈴は、生後まもなく両親から離されました。ミネコの母乳の出が悪く、五十鈴を人工哺育する必要があったためです。その後、五十鈴は飼育スタッフの手から、哺乳ビンに入ったミルクを飲んで大きくなりました。

十月、かねてから予定していたとおり市の広報誌や県内新聞の紙面を通じてカモシカの名前を募集しました。その結果、一二二名か

ら一三七件の応募があり、八二種類の名前が寄せられました。選考の結果、カモシカの名前は「五十鈴」に決定し、同じ名前を応募してくださった十三名が名付け親となりました。

十三名の皆さんが「五十鈴」という名前に込めた思いは、「山岳博物館五十周年を記念して」あるいは「祝して」といったことでした。

「応募いただいたすべての皆さんに心から感謝するとともに、今後も五十鈴の健やかな成長を願い見守っていただきたいと思います。」

大町もこれからが冬本番です。五十鈴にとって初めての冬です。で、私たちスタッフも五十鈴の健康管理には十分留意し、元気に春を迎えられるように努力していきます。



「五十鈴（いすず）」と命名されたニホンカモシカの赤ちゃん

八方尾根における注目すべき蛾類について ——オリンピックは蛾類の生息に 影響をおよぼしたか——（前編）

宮田 渡

一、はじめに

白馬村において冬季オリンピックが開催されたのは一九九八年である。これに先立って一九九四年に男女滑降競技の会場予定地の八方尾根において「アルペン競技会場地整備事業に係わる自然環境影響調査」の名のもとに「環境アセスメント」が実施された。

その後、一九九五年からオリンピック競技終了年の一九九八年にかけて同地の「環境モニタリング」が行われている。筆者は、一九九五年を除く各年の環境アセスメントならびに環境モニタリングのための昆虫部門の調査に携わった。ここでは、昆虫類の中から若干種の注目すべき蛾類をとりあげ、オリンピック会場整備事業がそれらの生息等に影響をあたえたかどうかを検証してみたい。

二、調査地と調査方法

調査対象地域は唐松岳（二六九六m）から東側に派生する八方尾根の下半部に位置し、平均傾斜角二・二度の斜面である。標高で

表1 調査定点の標高

地点	標高 (m)	地 名
1	一六八〇	黒菱平
2	一五〇〇	黒菱
3	一三八〇	兎平
4	一二〇〇	パノラマコース始点
5	一〇〇〇	馬止
6	七九〇	フィニッシュエリア

は一六八〇～七九〇mの範囲にあり、植生的には亜高山帯の下部から低山帯に含まれる。すなわち、当初のアルペン競技会場予定地である。

蛾類の調査は、主として夜間のライトトラップ法によったが、昼間もネットによる採集も行った。ライトトラップに使用したライトは、二〇w蛍光灯四本・ブラックライト一本・一〇〇w水銀灯一基である。これらを設置した六カ所の定点は図1・表1の通りである。

調査年は次の通りである。一九九四年（四月四日、七月三十日、八月一・四・八・十二・三十一日、十月一日）、一九九六年（七月一・四・十四・十七日、八月十一・十九・二十二日）一九九七年（八月一・四日、十月一日）、一九九八年（七月十四・二十四日、八月二十一日）。

三、調査結果

一九九四年から一九九八年の間に計二回の夜間採集を行い、二五科五一七種の蛾を得た。

標高一六八〇mの第1地点における夏の採集種類数を比較すると図2のようになる。すなわち、一九九四年八月八日のライトトラップに誘引された蛾類は、一二科一三三種、一九九六年八月二十四日のそれは一二科一四二種であった。共に一夜の飛来数としては多い方である。

これに対して、一九九七年八月一日の飛来数は一〇科八三種、一九九八年七月二十四日

の飛来数は九科九五種にとどまり、飛来数が一〇〇種を超えることはなかった。

次に、全定点で得られた五一七種の中より注目すべき種を挙げてみると表2の通りである。毎年コンスタントに飛来しているのは、タカネキクセダカモクメとクビジロツメヨトウのみであった。マツバラシラクモヨトウはオリンピック開催年の夏は採集されず、アズミキシタバはその前年から採れなくなっている。

調査期間中、散発的に灯火に飛来しているのが、ケンモンキシタバ・ムラサキアシフトクチバ・タイワンキシタバ・ルリモンクチバ・ネジロフトクチバ・ウスムラサキクチバ・フチグロシロヒメシヤク・サザナミナミ

シヤク・ナカクロモンシロナミシヤク・ミヤマチビナミシヤクなどである。

①タカネキクセダカモクメ

Caculia leuceri Saundiner

高山帯の稜線部に生息するヤガ科蛾類。亜高山帯でも採集されることがある。

採集例 1♂ 一九九四年八月八日、1♀ 一九九七年八月五日、1♂ 一九九六年八月二十二日、1♀ 一九九八年七月二十四日（以上、定点1）

八方尾根において本種を最初に記録したのは、石神井高校生物部（一九六七）である。一五〇〇m以下では採集できなかった。オリンピック会場整備事業の影響は全く受けていないといつてよい。

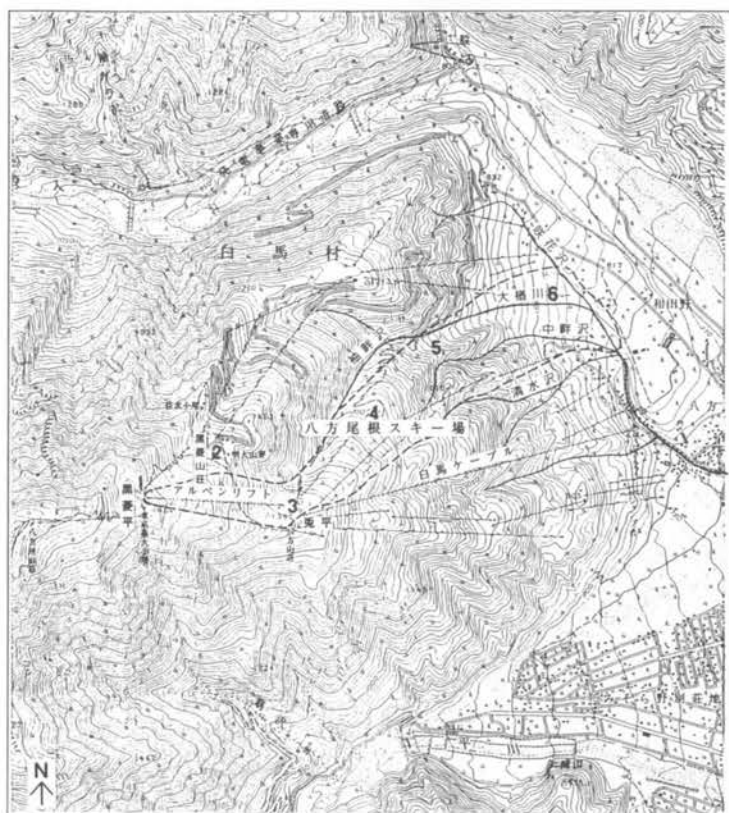


図1 ライトトラップ設置定点（1～6）

表2 主要蛾類15種

和名	一九九四	一九九六	一九九七	一九九八
①タカネキクセダカモクメ	○	○	○	○
②クビジロツメヨトウ	○	○	○	○
③アルプスギンウワバ	○	○	○	○
④マツバラシラクモヨトウ	○	○	○	○
⑤アズミキシタバ	○	○	○	○
⑥ケンモンキシタバ	○	○	○	○
⑦ムラサキアシブトクチバ	○	○	○	○
⑧タイワンキシタクチバ	○	○	○	○
⑨ルリモンクチバ	○	○	○	○
⑩ネジロフトクチバ	○	○	○	○
⑪ウスムラサキクチバ	○	○	○	○
⑫フチグロシロヒメシヤク	○	○	○	○
⑬サザナミナミシヤク	○	○	○	○
⑭ナカクロモンシロナミシヤク	○	○	○	○
⑮ミヤマチビナミシヤク	○	○	○	○

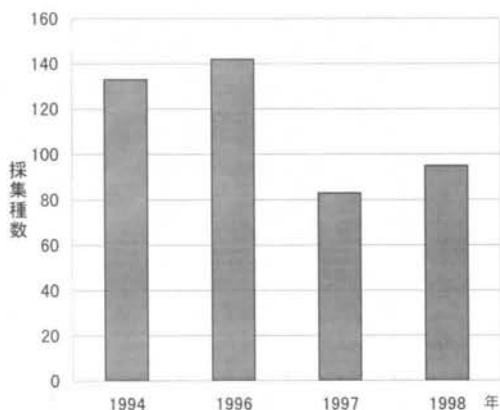


図2 定点1での種数比較

②クビジロツメヨトウ
Oncocnemis campicola Lederer
局地性の高い種であるが、八方尾根においては低山帯から亜高山にわたって広く分布する。
採集例 1♂1♀ 一九九四年八月八日、1♀ 一九九六年八月二十二日(定点2)、1♂1♀ 一九九七年八月一日(定点3)、1♂1♀ 一九九四年八月十九日(定点5) 長野県における本種の最初の発見は一九七〇年で、産地は下伊那郡長谷村である(大和田、一九七二)。そして、八方尾根における最初の発見は一九七三年九月であった(倉田、一九七四)。八方尾根東面の生息域は標高一〇〇〇m以上の草原である。
オリンピック会場整備事業の影響は全く受

けていないといつてよい。
③アルプスギンウワバ
Syngrapha otobungrit (Dyar)
白馬岳を基産地とする高山蛾である。高山帯の尾根筋ばかりでなく、白馬尻のような亜高山帯にも生息が確認されている(神保・柳田、一九七八)。
八方尾根でも亜高山帯の一六八〇mに生息する。
八方尾根における本種の最初の記録は、石神井高校生物部(一九六七)である。
採集例 3♂ 一九九七年八月二十二日、1♂ 一九九八年七月二十四日(共に定点1)。
オリンピック会場整備事業の影響はないように思われる。
④マツバラシラクモヨトウ
Amyra remissa (Hübner)
本種の長野県における最初の発見地は小谷村の小谷温泉である(杉、一九八九)。
八方尾根の産地は、草地または牛の放牧地である。
採集例 1♂ 一九九四年七月十四日、1♂ 一九九七年八月一日(共に定点2)。
一九九八年には定点1・2共に採集できなかった。しかし、生息環境の破壊は認められないことから、オリンピック会場整備事業の本種への影響はないものと思われる。
⑤アズミキシタバ
Catocala boreana Staudinger
八方尾根では、その北面・東面・南面の低山帯・亜高山帯に分布している。スキー場の密集している東面の分布はもとより僅少であった。
採集例 1♂ 一九九四年八月八日、1♂ 一九九六年八月二十二日(共に定点1)、1♀ 一九九四年八月十二日(定点5)。
一九九七年以降全く採集されていない。オリンピック会場整備事業の影響をもつとも被っている種である。本種の幼虫の食草である

イワシモツケの減少が原因かも知れない。
本種は一九六〇年代には平地にも分布していたが、開発が進みイワシモツケの群落が消滅しつつある。
アズミキシタバは環境庁のレッドデータブックにも記載されている貴重種である。
⑥ケンモンキシタバ
Catocala dentatopimpla Staudinger
本種の幼虫はハルニレを食樹とするため、その産出は局地的であるという(日本産蛾類大図鑑、一九八二)。
採集例 1♀ 一九九四年八月一日(定点4)。
⑦ムラサキアシブトクチバ
Dryopteris nutricula (Walker)
土着性が疑問視される種である。散発的に大町市扇沢のような標高一五〇〇m付近で採れることがある(宮田、一九八四)。
採集例 1♂1♀ 一九九四年十月一日(定点2)。
⑧タイワンキシタクチバ
Hypocla substriata Guenee
中距離の移動を行うと推定される種である(日本産蛾類大図鑑、一九八二)。例えば天狗山荘のような高山帯に移動した個体も採集されている(神保・柳田、一九七八)。
採集例 1♀ 一九九八年七月二十四日(定点1)。(つづく)

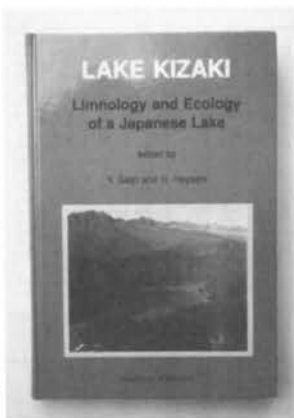
(大町山岳博物館嘱託学芸員、農学博士)

注 本文は大町山岳博物館編『新・北アルプス博物誌』(信濃毎日新聞社、二〇〇一)の編集時、新たに書き下ろしていただいた文章です。(編集部)

LAKE KIZAKI

—木崎湖のすべてを世界に紹介する本—
(西條八束・林秀剛 編)

峯村 隆



て湖・海の研究を専門とし、近年まで名古屋大学水圏科学研究所で木崎湖の化学的研究を続けてきた。もう一人の編者の林秀剛氏は信州大学理学部で久しく木崎湖の生態学的研究を行ってきた方である。

日本の個々の湖の中で、国際的な刊行物として出版されたのはそれまで琵琶湖(堀江正治編・一九八四年)のみであった。その間に日本の湖沼研究も格段に進歩し、本書も最新の研究成果を含んでいる。二人の編者が協力を得た執筆者は湖沼研究に関係した地学・物理学・化学・生物学ならびにその境界領域にわたり、四十六名におよぶ。

ちなみに本書は菅原健博士(一九九一年・九八二)に捧げられている。菅原博士は一九二五年に木崎湖を初めて訪れ、日本で最初にPH(ペーハー)を測定した人である。以来仁科三湖を主要なフィールドのひとつとして研究を深め、湖の化学的研究に大きな足跡を残した。特に一九三九年に刊行された英文の学位論文は国際的にも高い評価を得た。本文に入る前に、こうしたわが国湖沼研究の歴史を簡潔に紹介し、特に菅原博士グループの研究を要約してある。

『LAKE KIZAKI』はオランダのバックフェイス社から本年九月に刊行された。副題は「日本のひとつの湖の陸水学と生態学」と訳せる四二七ページの本である。

編者の一人、西條八束氏は一九四四(昭和十九)年、旧制松本高校在学中に物理の向井正幸教授の相伴をした木崎湖で初めて湖の研究というのを知り、それがきっかけとなっ

この本を手にしてまず目をひくのは表紙の鹿島槍ヶ岳を背景にした秋の木崎湖の航空写真である。この写真によって木崎湖が北アルプス山麓の湖であることを世界の

人々も一目で理解できるだろう。
また、地質・地形の章に入っているフオッサマグナ地域の概要を示す地質図などもカラーで美しく、興味をそそである。積雪の分布図に大町市の中学生の観察記録が引用されているのも、ほほえましい。

内容は同じ水系の青木湖・中綱湖も一部を含めて(一)湖のある地域の特性、(二)湖内の環境の概要、(三)生物地球化学、(四)微生物生態学、(五)動物植物生態学、(六)人間活動による生態系の最近の変化の六部に大別されている。(七)と(四)は物質循環が中心となっており、(五)は主に生態学的立場から生物種の記載も含まれている。

しかし、最近の環境問題に関わることは(六)以外においても記されており、近年話題になったアメーバーの大発生、コカナダモの繁殖とその対策として入れたソウギョの影響、淡水赤潮の発生、オオクチバス・コクチバスの繁殖に伴うワカサギの壊滅、浮遊藻類が増加しているのに高い透明度が測定されているという異常現象、中層の酸欠状態の進行、青木湖・木崎湖の水位変動などの問題についても、それぞれ詳しい研究結果が記されている。



Fig. 2.2 Distribution of snow depth from Omachi City to Lake Kizaki on March 12, 1991 (Statistics of snow depth measured at Omachi City Junior High School and Omachi City Junior High School) (approximately measured the snow depth (Chikuma 1991)).

掲載の積雪の分布図

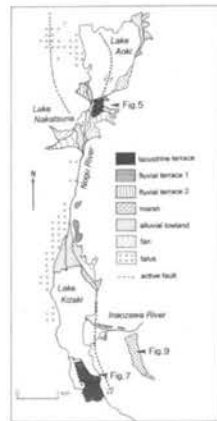


Fig. 2.4 Geomorphological map of the Kizaki Lake area (after Kadowaki 1999a).

なお、アメーバー問題を解明し、コカナダモの分布などについても緻密な調査をされながら数年前に他界された船越真樹氏の研究成果もおさめられている。

本書のおびただしい研究成果からもわかるように、木崎湖をはじめ仁科三湖は世界の学会からも注目されている貴重な湖である。

本書の刊行が、周辺地域一丸となつての三湖をとりまく一層の環境保全・回復の契機となることを、そして日本語版が刊行されることを強く願っている。

(大町山岳博物館学芸員)

*本書を西條氏から寄贈いただきました。館内で閲覧いただけますので、お気軽におこしください。

臨時休館のお知らせ

平成14年1月15日から3月15日まで常設展改修のため休館します。ご了承ください。

山と博物館第46巻第12号

発行 二〇〇一年十二月二十五日発行
〒271-8501 長野県大町市大字大町八〇五六一
市立大町山岳博物館
TEL:0266-22-1111
FAX:0266-22-1111
定価 大系タイムス印刷部
年額 一五〇〇円(送料共)切手不可
郵便振替口座番号 〇〇四〇七二一三九一